聖書翻訳時の時制選択についての一考察
― 聖書ヘブライ語原文とフランス語訳の比較 ―

池田　晶*

The Selection of Tense and Aspect in Translating Biblical Narrative: A Comparison of Biblical Hebrew and French Translation

Akira IKEDA

Abstract: This paper describes characteristics of verbs in Biblical Hebrew narratives and its French translation by referring to Weinrich's framework, foreground and background in narratives. Weinrich's framework is too simplified to analyse narratives because foreground itself in a narrative is not so much monolith as multilayered. But by compareing Biblical Hebrew and French, it turned out that French distinguishes clearly the difference between reality and non reality by tense and aspect, but on the other hand, Biblical Hebrew doesn't.　At the same time, it is necessary to adjust Weinrich's frame work in order to analyse Biblical Hebrew, whose tense and aspect system is very different from French, which Weinrich analysed to develop the framework.

Key words : French, Biblical Hebrew, Foreground, Background, Translation

1. はじめに

池田晶 (2023[1], 2024[2]) において、バンヴェニスト (1966)[3] やヴァインリヒ (1982)[4] の「説明の時制」「語りの時制」を念頭に置きつつ、フランス語話者の感覚を交えて、現代フランス語の単純過去と複合過去の分析を行った結果、従来の研究と大きく変わる点はなかったが、以下のようになった。

単純過去の特徴

- 「語り」の部分に用いる
- 現在との断絶のある過去を示す
- 書き言葉で用いられる
- 話し言葉（会話文）ではほぼ用いられないが、ごくまれに許容される例もある
- フォーマルなものになる（格調の高さ）
- 出来事の継起性

複合過去の特徴

- 話し言葉と書き言葉の両方で用いられる会話文で用いる
- 形式ばらない
- 直接語りかけてくるように感じられる
- 出来事一つ一つが孤立した印象があり、語りで使うとまとまりがないイメージになる
- より身近で実体験のように感じられる（虚構性ではなく現実性が高く感じられる）

ただし用法的には「単純過去」寄りの「複合過去」、「複合過去」寄りの「単純過去」と解釈されるような例もあった。以上のように、単純過去と複合過去の用法を見たが、「語り」で用いられる単純過去については、物語の「前景」と「背景」が大きくかかわってくる。本論では語りにおける「前景」と「背景」を参照しながら、聖書ヘブライ語の物語と、その現代フランス語訳の動詞の特徴を描き出すことを目的とする。二つの言語を比較する理由は、一つの言語だけを見ているとわからないことが、ほかの言語との比較を通して見えてくると考えられることにある。

2. 語りにおける「前景」「背景」の枠組みと疑問

語りにおける「前景」「背景」の分類は、ヴァインリヒ (1982) のフランス語文学テキストの時制分析でのために構築された枠組みである。その枠組みについては、以下の通り池田晶 (2023)でも紹介している。

「語りの時制」の面の発話行為は過去の事柄を物語るという

（2025 年 2 月 7 日受理）
＊ 宇部工業高等専門学校　一般科

特性を持つが、そのとき話し手はまったく介入することなく出来事自らが物語る。一方、「説明の時制」の特性は話し手と聞き手の二者を想定し、話し手が聞き手に何らかの影響を与えようとするものである。テキスト時間と行為時間の関係についてのなんらかの問題性に話者が聞き手の注意を喚起しようとしない場合、ゼロ段階と呼ばれる。このゼロ段階が語りの基調となる。行為時間を遡及的に捉えているのが回顧時制である 。語りの時制におけるゼロ段階の単純過去と半過去のそれぞれの物語上での役割を説明するために用いられたのが前景・背景である。物語の前景は単純過去が担い、背景を半過去が担う。

以上をまとめ、池田晶 (2024) で紹介したヴァインリヒの枠組みに「前景」「背景」を加えると、以下の表 1 のようになる。

【表 1】

	回顧時制	ゼロ段階
説明の時制	複合過去	現在
語りの時制	大過去、前過去	《前景》単純過去 《背景》半過去

※本論とは関わらない「予見時制」の部分は省略した

ただし、多くの研究者が述べている通り、説明の時制である複合過去も実際に頻出する。更に、「前景」とは「物語の主要な出来事」を時間の流れとともに伝達する部分、つまり「あらすじ」と言える部分で、「背景」とは、Hopper (1979: 215)[5] で述べられている通り「物語るのではなくて、むしろ、物語を支え、補充し、それに注釈を加える」ものである。つまり物語を説明する部分、ともいえるのである。多くの分析では、確かに上に示した「表 1」に当てはまっている。しかし、語りにも複合過去が出現するという事実から、説明の時制と語りの時制、というのはどこまではっきりと区別できるものなのか、また、物語の「背景」とは、物語を説明する部分、ということであれば、「語りの時制における背景」と説明の時制で示されている部分とは、どのように異なっているのか、という疑問が残る。もしかしたら、語りの時制と説明の時制の区別は、想像以上に緩やかなものかもしれない。また、前景、背景という二項対立だけで本当に良いのか、ということにも疑問が残る。特に、物語中に起きたことを登場人物が他の人物に語るとき、もともとの出来事が物語の前景であるとして、それを登場人物の発言を介したら、その発言そのものの中の「前景」はどのように扱われるべきなのだろうか。理論の有効性を認めつつも、前景そのものにもいくつもの層があるのではないかと考えられる。

3. ヘブライ語聖書原文とフランス語翻訳比較

3.1 使用テキストについて

池田晶 (2013)[6] では、創世記のヨセフ物語の中の登場人物であるファラオの体験が、地の文の中で語られている部分と、ファラオがその体験をヨセフに語る部分、つまり会話文中で個人的体験談として再話される部分（一人称物語）とを聖書ヘブライ語原文で分析し、その際、前景・背景をみる際には、意味や動詞形態だけでなく語り手の問題も射程に入れて考察する必要があるということを示したが、ここでは、原文だけでなく、翻訳を通してではあるが、ヴァインリヒの用いたフランス語での分析を行う。フランス語翻訳としては、優れた翻訳として知られるエルサレム・フランス聖書考古学学院によって編纂された La Bible de Jérusalem、ヘブライ語原文には Biblia Hebraica Stuttgartensia を用いた。両者ともに、Bible Works にデータとして収録されている。

3.2 聖書ヘブライ語動詞の前景・背景について

紙幅の関係で深く立ち入ることは出来ないが、聖書ヘブライ語では、前景・背景については以下のように捉えられてきた。

前景：　wayyiqtol 形　(wyqtl と略表記)
背景：　qatal 形、yiqtol 形、分詞、不定形等

ただし、聖書ヘブライ語の多くの研究で指摘された通り、動詞の時制選択と前景・背景とを固定的に対応させて捉える方法では無理が生じるということが明らかとなっている。物語の前景・背景を捉えるには、動詞の形態にとらわれない新たな方法が必要ということで、池田晶 (2006)[7]では物語の前景をみるにあたり、重要だと考えられる要素は「出来事の時間に沿った連鎖性」と考え、結果として背景をマークすると言われてきた分詞句を導入する hinne 節が前景を担うことがある、ということを明らかにした。

3.3 分析例 1：創世記 41:5-7（三人称物語）

この部分は、不吉な夢を見て不安になったエジプトのファラオが、イスラエルの地から売られてきた賢者のヨセフに夢解きをしてもらうという三人称物語である。地の文の wyqtl 形はフランス語での単純過去に相当する。原文、フランス語翻訳、訳例で字下げがしてある部分は、ファラオが見た夢の内容であるが、見た夢を詳しく「説明する」部分であるので、物語としては「背景」に相当する。また物語の中の出来事である「現実の世界」と、登場人物の見る夢の中の出来事である「非現実の世界」は同じ時間軸上の出来事ではないので、お互いに「時間の上での断絶がある」ということができる。

《聖書ヘブライ語原文》

41:5 וַיִּישָׁן wyqtl וַיַּחֲלֹם wyqtl שֵׁנִית

וְהִנֵּה 入導分詞 שֶׁבַע שִׁבֳּלִים עֹלֹת 分詞 בְּקָנֶה אֶחָד
בְּרִיאוֹת וְטֹבוֹת׃ 6 וְהִנֵּה 入導分詞 שֶׁבַע שִׁבֳּלִים דַּקּוֹת

שִׁבֹּלֶת קְטֹנָה צְמֻחֹת[分詞] אַחֲרֵיהֶן׃ 7 וַתִּבְלַע נָה
הַשִּׁבֹּלִים הַדַּקּוֹת אֶת שֶׁבַע הַשִּׁבֹּלִים הַבְּרִיאוֹת[wyqtl]
וְהַמְּלֵאוֹת

וַיִּיקַץ[wyqtl] פַּרְעֹה וְהִנֵּה חֲלוֹם׃

《訳例》

41:5 彼は**眠り** wyqtl、二度目の夢を**見た** wyqtl。

すると見よ[分詞導入]、七つの穂が一つの美しく良い茎から出てきた[分詞]。6 そして見よ[分詞導入]、その後から七つの細く東風で焼けた穂が出てきた[分詞]。7 細い穂は七つの美しく太い穂を**飲み込んだ** wyqtl。

そしてファラオは**目が覚めた** wyqtl。すると見よ、それは夢（だった）。

眠って夢を見て目覚めた、という一連の「物語の中の現実世界」での出来事は、同一の世界の中での一貫した時間の流れに沿って全て wyqtl で書かれている。一方、全体としては「背景」とされる夢の内容については、分詞句で時間の流れに沿って書かれており、しかも最後の「飲み込んだ」というのは wyqtl で書かれている。これらの分詞句と wyqtl は背景内で連鎖をなしている。だだし、通常なら wyqtl は時間の流れに沿って出来事を述べる動詞形態であるので、夢の世界の出来事である「飲み込む」ということと、「ファラオが目覚める」というのは、時間軸上では断絶があるべきである。この「ファラオが目覚めた」というのは、現実の世界の「二度目の夢を見た」という wyqtl と夢の世界での「細い穂が飲み込んだ」という wyqtl のどちらと連鎖をなしているのだろうか。この部分を見る限り、異なる時間軸の境目があいまいになっていると考えることが出来そうである。

《フランス語翻訳》

41:5 Il **se rendormit** 単純過去 et **eut** 単純過去 un second songe :

sept épis montaient 半過去 d'une même tige, gros et beaux. 6 Mais voici que sept épis grêles et brûlés par le vent d'est **poussèrent** 単純過去 après eux. 7 Et les épis grêles **engloutirent** 単純過去 les sept épis gros et pleins.

Alors Pharaon s'éveilla 半過去 : voilà que c'était 半過去 un songe !

《訳例》 3

41:5 彼は**再び眠り** 単純過去、二度目の夢を※**見た** 単純過去。

七つの穂が一本の茎から出てきて 半過去、（それは）大きく美しかった。6 しかし、細く東風で焼かれた七つの穂がそれらのあとで**出てきた** 単純過去。7 その細い穂は七つの大きく美しい穂を**飲み込んだ** 単純過去。

そしてファラオは目覚めた 半過去。それは夢だった 半過去！

※字句通りには「二つ目の夢を持った」

聖書ヘブライ語とフランス語翻訳の動詞形態を抜き出すと、次のようになる。

ファラオが眠る wyqtl／単純過去
夢を見る wyqtl／単純過去

美しい穂が出る 分詞導入＋分詞／半過去
細い穂が出る 分詞導入＋分詞／単純過去
細い穂が美しい穂を飲み込む wyqtl／単純過去

ファラオが目覚める wyqtl／半過去

フランス語翻訳では眠って夢を見た、という現実の世界のことは単純過去で書かれているが、「目覚めた」という部分が本来なら「背景」を担うとされる半過去形で書かれている。しかし、六鹿豊 (2016: 205)[8] では、この半過去について「一見、単純過去を用いるのが適切に思える状況で、あえて半過去を使うことによって、出来事の進展を長引かせて強く印象付ける効果があります」という「絵画的半過去」の説明をしている。同様に、町田健 (2015: 133)[9] では「背景ではなく主要な事態なのに、単純過去（複合過去）ではなくて半過去を使って表されることがある。（中略）主要な事態を半過去で表すことで、その事態を生き生きと表す効果が出るということで、半過去のこの用法は『絵画的半過去』と呼ばれる」と述べられ、更に東郷雄二 (2019: 73)[10] では「語りで瞬間動詞に単純過去形や複合過去形の代わりに用いて臨場感を与える用法を絵画的半過去と呼ぶ」と述べられている。このように、前景を担う「絵画的半過去」が紹介されている。それでは、「夢の中の出来事」を見てみよう。物語の前景である現実世界の出来事を述べた単純過去から、異なる時間軸上の夢の世界に入る部分で半過去に切り替わり「穂が出てきた」ことが報告される。それに引き続き、細い穂が出てきたことと、それらが太い穂を飲み込んだことが単純過去で報告されている。背景である夢の世界の出来事が、本来は前景を担う単純過去が用いられているのである。ただし、現実の世界と夢の世界の全体を見渡してみると興味深いことが指摘できる。つまり、現実世界のことが二つの単純過去で報告された後、夢の世界が半過去で導入され、それに続く出来事が単純過去で報告され、そして現実の世界に戻る「目が覚めた」という出来事が絵画的半過去で報告されている。つまり、時間軸が異なる世界の切り替わりの時点で単純過去から半過去へ、ということが起こっているのである。このことから、前景・背景という区別だけでなく、時間軸の切り替わりを動詞形態の変更で表して

いるということが出来そうである。

3.4 分析例 2：創世記 41:22-24（一人称物語）

本箇所は、前節で分析した創世記 41:5-7 の三人称物語を、夢を見た張本人である登場人物のファラオが個人的体験談として別の登場人物に語る一人称物語を通しての再話である。三人称物語の場合は、語り手と聞き手が同じ時間軸を共有していないが（或いは「語り手不在」という考え方もある）、一人称物語では、物語の登場人物が同じ時間軸上にいるということもあり、話し言葉的な要素も垣間見ることができるということが予想される。

《聖書ヘブライ語原文》

41:22 וְאֶרְאֶ wyqtl בַּחֲלֹמִי

וְהִנֵּה ו 分詞導入 שֶׁבַע שִׁבֳּלִים עֹלֹת 分詞 בְּקָנֶה אֶחָד
מְלֵאֹת וְטֹבוֹת: 23 וְהִנֵּה 分詞導入 שֶׁבַע שִׁבֳּלִים צְנֻמוֹת
דַּקּוֹת זְרִיחוֹת קָדִים צֹמְחוֹת 分詞 אַחֲרֵיהֶם: 24 וַתִּבְלַעְנָה
wyqtl הַשִּׁבֳּלִים הַדַּקּוֹת אֶת שֶׁבַע הַשִּׁבֳּלִים הַטֹּבוֹת

וָאֹמַר wyqtl אֶל־הַחַרְטֻמִּים וְאֵין מַגִּיד לִי:

《訳例》

41:22 私は夢の中で**見た** wyqtl。

そして見よ 分詞導入、七つの穂が一つの太く良い茎から出てきた 分詞。23 そして見よ 分詞導入、七つの細い細い東風で焼かれた穂がそのあとで出てきた 分詞。24 細い穂は七つの良い穂を**飲み込んだ** wyqtl。

そして私は、占い師たちに**話した** wyqtl が、私に答えるものはなし。

この個所は、夢の内容を挟み込む「物語上の現実の世界」の出来事が、物語の語り手ではなく、登場人物が一人称で語っているので、基本的には 41:5-7 の三人称の部分が一人称に代っただけで、それ以外、wyqtl 形と分詞の使用には差はない。それでは、フランス語翻訳はどうなっているであろうか。原文と同じく、人称以外には相違はないであろうか。

《フランス語翻訳》

41:22 Puis j'ai vu 複合過去 en songe

4

sept épis monter 不定形 d'une même tige, pleins et beaux. 23 Mais voici que sept épis desséchés, grêles et brûlés par le vent d'est **poussèrent** 単純過去 après eux. 24 Et les épis grêles **engloutirent** 単純過去 les sept beaux épis.

J'ai dit 複合過去 cela aux magiciens, mais il n'y a personne qui me donne la réponse.

《訳例》

41:22私は夢の中で見た 複合過去

七つの穂が一本の大きく美しい茎から出てきた 不定形。23しかし、七つの乾燥した細く東風で焼けた穂がそのあとで**出てきた** 単純過去。24そして細い穂は七つの美しい穂を**飲み込んだ** 単純過去。

私はそのことを占い師に話した 複合過去が、答えられるものは1人もいなかった。

フランス語では、夢を見たことをファラオが自らの体験談として一人称で報告しているが、この部分自体は、物語全体で言うと会話文なので「背景」となる。また、ファラオが、同じ物語の世界の中の登場人物ヨセフに話す部分であるので、話し言葉としての特徴も見られるともいえる。最初の「私は夢の中で見た」ということも、三人称物語の同箇所の単純過去とは異なり、複合過去が用いられている。そして夢の中の出来事の「美しい茎が出てきた」という部分であるが、ここは、「夢の中で見た」という視覚動詞との組み合わせで、構文上不定形にすることしかできない。それ以降の夢の出来事は、三人称の語りでの夢の内容記述で用いられた半過去とは異なり、単純過去が用いられている。この部分は、夢の中の出来事は、明らかに会話が繰り広げられている「物語世界における現実」とは、時間軸、次元の異なる世界のこと、つまり「断絶」を表している、とみることができる。そして、夢について語り終えた後、現実の世界で占い師に「話した」ということが複合過去で記述されている、冒頭の「夢で見た」「話した」というのが、同じ世界での出来事である、ということが顕著に示されていると同時に、普通の話し言葉と同じ動詞選択になっている。

聖書ヘブライ語とフランス語翻訳の動詞形態を抜き出すと、次のようになる。

私は夢の中で見た wyqtl／複合過去

美しい穂が出る 分詞導入＋分詞／不定形
細い穂が出る 分詞導入＋分詞／単純過去
細い穂が美しい穂を飲み込む wyqtl／単純過去

私は占い師に話した wyqtl／複合過去

人称の違いを除くと 41:5-7 と、41:22-24 では、動詞そのものに若干の違いがあるが、内容は同一である。以上を日本語訳例をもとに、それぞれの動詞形態をまとめると次の表 2 のようになる。

【表 2】

訳例	三人称語り		一人称語り	
	ヘブライ語	フランス語	ヘブライ語	フランス語
眠った	wyqtl	単純過去	--	--
夢を見た	wyqtl	単純過去	wyqtl	複合過去
出てきた	分詞	半過去	分詞	不定形
出てきた	分詞	半過去	分詞	単純過去
飲み込んだ	wyqtl	単純過去	wyqtl	単純過去
目覚めた・話した*	wyqtl	半過去	wyqtl	複合過去

「目覚めた・話した」については、三人称と一人称で使っている動詞が異なるが、どちらも wyqtl を用いているので一つにまとめた。表より、2 種類の物語談話において次のことが指摘できる。

- 聖書ヘブライ語原文
  - ✓ 人称の違いがあるが両方で同一の動詞形態を使用
  - ✓ 時間の経過とともに語られているために、分詞も前景的な扱いとなりえる
  - ✓ 時間の連鎖を表す wyqtl が物語内で異なる時間軸の境目を移行する際も使われており、境目があいまいになる
- フランス語翻訳
  - ✓ 時間の経過とともに語られているために、半過去、複合過去、場合によっては不定形も前景的な扱いとなりえる
  - ✓ wyqtl 形が場合に応じて単純過去、半過去、複合過去に訳し分けられている
  - ✓ 構文の制約がある場合を除き、原文の分詞が半過去、単純過去に訳し分けられている
  - ✓ 物語内で異なる時間軸の境目を移行する際は、必ず動詞形態が変えられており、境目がはっきりと意識されている

4. 結論

本稿での分析を通して、ヴァインリヒの語りの時制と説明の時制で分類されている動詞は、確かに多くのテキストに当てはまるものではあるものの、「背景」とされている半過去に「絵画的半過去」という用法があることは前提とされておらず、あまりにも固定的な一面があることが明らかになった。また、全体的に背景とされる部分にも前景を担う単純過去が使用されていることも明らかとなった。このことから、前景と背景という区分は一般的に認められているが、前景は一枚岩ではなく、幾層にも重なり合ったものである、ということが分かった。また、翻訳という面から見ても、聖書ヘブライ語動詞の 1 つの時制形態が、フランス語では数種類の動詞形態に訳し分けられいることも明らかとなった。このことは、ある言語の特定の 1 つの時制（アスペクトも含めて）は、別の言語ではいくつかの時制で表現できるということをはっきりと示していると言える。ヴァインリヒの枠組みは、フランス語の時制システムの一面を表しているものの、ある時制の持つ意味的な豊かさを表すことには至っていない。今回の結果は、分析対象が時制システムの異なる言語からの翻訳だからなのか否かについては今後の課題にしたいと思う。また、フランス語の分析から得られたヴァインリヒの枠組みを時制システムの異なる聖書ヘブライ語に適用するときにはさらなる調整が必要だと言えそうである。現実と非現実という時間軸の断絶という面においては、フランス語ははっきりと区別し、聖書ヘブライ語はあいまいな点がある、ということは、聖書ヘブライ語のみを見ていては分からない問題であった。今後はさらに分析対象を広げていきたいと思う。

参考文献

1) 池田晶：聖書ヘブライ語 qatal 形の時制解釈：現代フランス語の複合過去と単純過去を手掛かりに, 宇部工業高等専門学校研究報告, 69 号, pp.22-28, 2023.
2) 池田晶：現代フランス語の三人称物語における単純過去と複合過去についての一考察,宇部工業高等専門学校研究報告, 70 号, pp.16-25, 2024.
3) バンヴェニスト, E.：一般言語学の諸問題, 川村正夫他訳, みすず書房, 1966.
4) ヴァインリヒ, H.：時制論―文学テクストの分析, 脇阪豊他訳, 紀伊國屋書店, 1982.
5) Hopper, P. J.: Aspect and foregrounding in discourse. In: T. Givón (ed.) *Discourse and syntax*, 213-241, 1979.
6) 池田晶：聖書ヘブライ語の物語における前景・背景,そして語り手に関する一考察, Nidaba (42), pp.11-20, 2013.
7) 池田晶：聖書ヘブライ語の物語における hinne の用法―創世記に基づく談話分析―　筑波大学人文社会科学研究科文芸・言語専攻中間評価論文, 2006.
8) 六鹿豊：これならわかるフランス語文法　～入門から上級まで, NHK 出版, 2016.
9) 町田健：フランス語文法総解説, 研究社, 2015.
10) 東郷雄二：フランス文法総まとめ, 白水社, 2019.